

男子新体操指導者海外派遣事業の分析  
the International Promotion of Men's Rhythmic Gymnastics:  
Based on the Consideration of Coach Dispatch Programme

スポーツクラブマネジメントコース

野田 光太郎 5015A314-8

研究指導教員 間野義之

### 1. 緒言

本論は男子新体操指導者海外派遣事業の概要を明らかにし、また事業に関わった指導者たちが認識する事業の問題点や今後の課題を分析することで、事業および競技の普及にまつわる問題の構造を考察するものである。

男子新体操は、競技スポーツの国際的活躍が明確に求められるようになってきた 2001 年前後から、国際的な競技の普及を目指し、海外に指導者を派遣する事業を行っていた。しかしこの事業については報告書なども作成されておらず、当時の内部資料なども保存されていないため、その概要や、事業が 2006 年前後に終了した事情などが十分に明らかになっていない。そこで本論では、日本発祥のマイナースポーツとして国際化に取り組んだ男子新体操指導者海外派遣事業の概要を明らかにし、また事業に関わった指導者たちが認識する事業の問題点や今後の課題を分析する。

### 2. 研究の意義

本研究の意義は、日本発祥であり比較的マイナーな近代スポーツの国際的普及という事例から現在の日本における競技団体のあり方を考察し、これまであまり取り組まれていなかった領域の研究の蓄積に寄与する点にある。また、男子新体操の指導者海外派遣事業が継続困難となった要因の考察は、国際化を目指す他のマイナースポーツにとっても参照できる先行事例となると考える。この点に本研究の社会的な意義があるものと思われる。

### 3. 先行研究

近年では、競技団体の立場から競技の普及活動を考察する論考が発表されている。町田(2014)はフライングフットボールの日本での普及活動に関して、競技特性が有効であったとふりかえっている。また長谷川(2014)は、日本フットバッグ協会が効果的な普及活動を展開できていない要因として、大会開催施設が議論された際などに、リスクの低減が

広報よりも優先されたこと、マンパワーの不足、財政的に余裕があり、組織として普及活動を展開する差し迫った必要性が乏しかったこと、理事間で普及活動に対する考え方に違いがあったことを挙げている。

スポーツ指導者の海外派遣事業を考察の対象とした先行研究としては、南アメリカで剣道を普及する活動を行った事例を検証した岩本(2014)、海外に派遣されたサッカー指導者のレジリエンスに注目し、時間経過にともなう指導者の心理的变化を分析した松山・土屋(2015)などがある。

本研究では、先行研究に挙げられた課題を男子新体操指導者も共有しているのか、上記以外にはどのような点が問題として認識されているのかを考察する。

### 4. 研究課題

分析のための研究課題 (RQ) を以下に示す。

RQ1: 男子新体操の指導者海外派遣事業として、いつ、どこで、何が行われたのか。

RQ2: 海外に派遣された男子新体操指導者は、どのような点を事業の問題や課題と考えているのか。

### 5. 方法

本調査の対象者は、2001-2006 年に男子新体操国際化普及事業として海外に渡った男子新体操指導者全員とした。8名の各対象者には約 1-2 時間の半構造化面接を行った。質問は①海外に派遣されることになったきっかけ、②派遣された状況はどのようなものだったか、③何か困ったことはあったか、④もし同じ事業がまた行われるとしたら、どうすればもっとうまく出来ると思うか、であった。①②は RQ1 に、③④は RQ2 に対応している。メールでのやりとりを希望した 2 名の対象者には、同様の質問をメールで送信し、返信を受け取った。

面接の文字起こしデータは、RQ1 に関しては主に表にまとめ、RQ2 に関しては SCAT (Steps for Coding and Theorizing) 分析を行った。質的デー

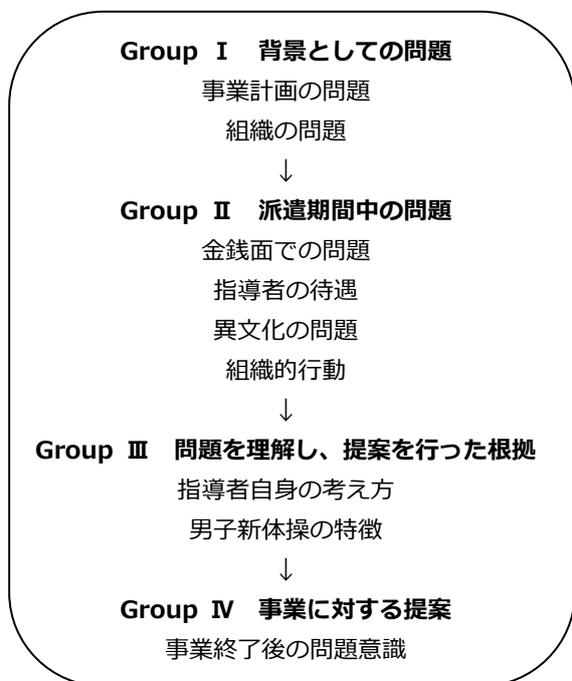
タ分析はとくに再文脈化の段階での恣意性がしばしば問題とされてきた。そこで本論では、コーディングの手続きを定式化し分析過程の再現可能性を高めた SCAT 分析を分析方法として採用した。

## 6. 結果

RQ1 の結果は調査協力者の証言および 2003 年・2005 年大会資料を整理することにより、海外派遣時に行われた指導の状況が明らかになり、それらを表にまとめた。また調査協力者の証言および日本体操協会発行の雑誌『RG』、指導者を受け入れたブリティッシュ・コロンビア州新体操協会の Mario Lam 氏が作成した男子新体操を紹介するウェブサイト「Men's Rhythmic Gymnastics」、当時の新聞記事によって、事業の始動から中断までの経緯が明らかになった。

RQ2 の結果は、事業の問題点に関する認識として調査協力者の回答を切片化し、それぞれを SCAT 分析によって分析した。コード化の結果として抽出された調査協力者 9 名のストーリーラインと、ストーリーラインをもとに導き出された合計 53 の理論記述を示した。

## 7. 考察



RQ1 については生徒の人数や年齢、練習設備に見られる特徴から、当時の指導状況を考察した。

また RQ2 については、調査協力者の語りから読

み取れる事業の問題構造を上記の通り図解した。

Group I 「背景としての問題」は事業全体に通底している問題であり、調査協力者たちが派遣期間中に感じた Group II 「派遣期間中の問題」が起こる背景となったといえる事柄である。また派遣事業に関する問題を指導者自身の考え方や男子新体操の特徴と絡めて想起する中で（これが Group III 「問題を理解し、提案を行った根拠」に該当する）、調査協力者たちは Group IV のような問題意識を提示していた。

## 8. 結言

分析によって、RQ1 に関しては、事業の概要が表にまとめられ、事業が開始し終了した経緯を確認した。RQ2 に関しては、事業の下地となる組織や計画にある問題、事業実施中に起こる問題、事業をふりかえって提案という形で暗示される問題をそれぞれ明らかにした。また、事業にまつわる提案は、事業の下地にある問題や事業実施中に起こる問題が、指導者の考え方と競技特性に対する理解の下で振り返られる中で示されるものであることを示した。

本論では競技を国際的に普及させる取り組みの萌芽期に生じ得る問題の構造を明らかにした。日本発祥のスポーツの国際的普及に関しては、柔道のような成功事例に対しては調査・研究が既に行われている。こうした先行研究と比較した際の本論の特色は、本論の対象とした男子新体操が、まさに競技の国際化の途上にあるという点である。

また本論で得られた知見の、マイナースポーツ一般への応用可能性は、問題の構造という部分に見出すことができるだろう。本論のいう Group I に挙げた「事業計画の問題」と「組織の問題」、またそのような背景の中で生じる Group II すなわち「金銭面での問題」「指導者の待遇」「異文化の問題」「組織的行動」は、男子新体操に限らず他のマイナースポーツでも検討されるべき事柄であると推測される。一方、Group IV に示した提案事項は、Group III に示した、競技者たちが持つ考え方や競技特性への理解を元にしてなされるものであるため、競技ごとに異なることが予想される。こうした点が今後検証されることで、マイナースポーツを国際的に普及させる際に共通して生じる問題の構造が明らかになると考える。